

イスラエルにおける少数派の文学言語

——アラブ人作家アントン・シャンマースとサイド・カシューアのヘブライ語選択——

細田和江*

Literary Language of the Minority in Israel: Hebrew Language Choice for Two Israeli Arab Writers

HOSODA Kazue

This article deals with the choice of the literary language by two prominent Palestinian Arab writers in Israel who write literary works in Hebrew. For the minority, what is the meaning of writing novels in the majority's language? Although most Palestinian Arab writers in Israel are writing in Arabic, some writers choose Hebrew. Anton Shammas (1950-) chose the Hebrew language for "Arabesques" because of his responsibility. He wrote the story set in some traditional Arab world in Hebrew. That language allows him "security" at the same time. On the other hand, it is not yet a choice for a younger generation writer, Sayed Kashua (1975-). He is willing to write in Hebrew because he doesn't know much about literary Arabic. The world of his writings is in the Israeli arena. These language choices, in some extent, relate to the difference in generations. That is to say their choices are changing from "spontaneous" motivation to "unconscious" ones.

キーワード：ヘブライ語，アラビア語，アイデンティティ，言語選択，マイノリティ
Key Words: Hebrew, Arabic, Identity, Choice of language, Minority

はじめに——多言語環境にある作家の言語選択——

今日のグローバル化した世界において、多言語環境にある作家はあまた存在する。そもそもマイノリティがマジョリティの言語を用いて小説を書く行為は、ユダヤ系チェコ人であったカフカがドイツ語で書いたことに代表されるように、近代小説の誕生以来脈々と続いている¹⁾。B. アンダーソンは著書『想像の共同体』で、ナショナリズムが近代におい

* 中央大学政策文化総合研究所準研究員

Associate Fellow, The Institute of Policy and Cultural Studies, Chuo University

て高揚したのは、言語とその言語を流布する出版の発達に依るところが大きいと述べた(アンダーソン 1997: 75-90.)。その論点から見ても、ユダヤ国家イスラエルを建国し、古代より用いられていた典礼語を現代口語に対応させた現代ヘブライ語をその国語として設定することに至った一連の歴史は、このナショナリズムが結就した成功例といってよい。一方でシオニズムと結びついた現代ヘブライ語は「聖なる言語」から「俗語」へと変貌する過程でその「ユダヤ性」アイデンティティをそぎ落としてゆく。つまり、ユダヤ人の共通語であったはずの現代ヘブライ語は「イスラエル語」として地域言語となった。この流れを生み出した要因には、アラブ諸国出身のユダヤ人作家やイスラエル・アラブ人作家の存在が関わっている。

言語は社会的カテゴリーのなかで個々の属性=アイデンティティを決定づけるものの1つである。バイリンガル状態にある作家は、成長する過程で自然に身につけた母語と別の言語を併用する、もしくはその言語から離れて他の言語を用いることで自らの帰属意識の揺らぎを意識する。

本論稿の主眼は、言語によって国家を統合したイスラエル社会における言語環境とそれが生み出したアイデンティティの問題を、イスラエル・アラブ人作家による言語選択を例にして問うことにある。

I イスラエル・アラブ人作家の言語選択²⁾

イスラエルは建国後、国内に留まっていた既住のアラブ人に市民権を与えた。通常彼らは「イスラエル(市民の)のアラブ人」と呼ばれ、イスラエルの人口のおよそ2割を占める。彼らはイスラエルの社会において「パレスチナ人」という呼称には含まれないが、なかには「パレスチナ人」としてのアイデンティティを強く意識しているものも多い。また、周辺アラブ諸国出身のユダヤ人が「イスラエル・アラブ人」ではなくあえて「ミズラヒーム」(東洋系の意)と呼ばれるなど、呼称に関しては自称/他称、法的呼称などが混在し、そこには様々な議論がある。本論では呼称に関する議論を留保し、彼らイスラエルの内部に生きるパレスチナ・アラブ人(ドルーズ派も含めて)をイスラエル・アラブ人と総称する。

イスラエル・アラブ人は、母語であるアラビア語とともに現代ヘブライ語も解す。なぜなら、学業や就職に、さらにドルーズ派やベドウィンにとっては兵役³⁾の際に必須となるからである。2つの言語の間を行き来しながら生きる彼らの現状は、文学言語の選択に影響を与える。アラブ人作家は母語であるアラビア語と現代ヘブライ語のどちらかを(あるいは両方を)選ぶ。

彼らの大多数は母語であるアラビア語での創作活動を選択する⁴⁾。アラブ人作家にとって、国連の公用語かつイスラームの聖典クルアーンの言語であり、世界中で2億人を超える話者がいると推計されているアラビア語で書くことは、より大きな市場を持つことに繋がるからである。実際、イスラエル・アラブ人作家の第一人者であるエミール・ハビービー⁵⁾ (‘Imīl Ḥabībī: 1922–1996) やパレスチナの抵抗詩人として名高いマフムード・ダルウィーシュ⁶⁾ (Maḥmūd Darwīsh: 1941–2008) がアラビア語で発表した作品は、バイルトやカイロで流通し、その結果、2人ともアラブ文学史における重要な作家／詩人として認知されている⁷⁾。その他にも、ドルーズ派の詩人でハビービーらとともに共産党の機関紙『統一』(*Al-Ittihād*)に参加していたサミーフ・アル＝カーセム (Samīḥ al-Qāsim: 1939–) ともアラビア語で詩作を行っている。

イスラエルにおいて、アラブ人による初のアラビア語小説は、ナザレの弁護士であったタウフィーク・ムアンマル (Tawfiq Mu‘ammar: 1914–1988) による『ある難民の記憶あるいは戦闘のなかのハイファ』(*Mudhakkirāt Lāji’ au Ḥaifā fi al-Ma‘uraka*: 1958) であった。しかしハイファを舞台に1948年のパレスチナ人の離散「ナクバ」が描かれたこの作品は、次作の『気にするな』(*Bthūn*: 1959)と同様、小説というよりノンフィクションに近いものであった。そのため、実際は1962年に出版された、イスラエルの『今日の世界』(*Ha-‘Olam Ha-Ze*)誌や『ハアレツ』紙でジャーナリストとして活躍していたアターウッラー・マンスール (‘Atā’ llāh Maṣṣūr: 1934–) の『そしてサミーラは留まった』(*Wabaqiyat Samīra*: 1962) が初的小説とされている。

他方、彼らのなかにはアラビア語と現代ヘブライ語の両方を用いて文学活動を行うものもいる⁸⁾。その一人ナイーム・アライディ (Na‘īm ‘Araidī: 1950–) は、1950年イスラエル北部のマガール村で生まれたドルーズ派の詩人であり作家であり⁹⁾、2013年現在ヘブライ語とアラビア語で詩集を出版している。アライディ自身は、「アラビア語で書けるものはアラビア語で、アラビア語で書けないものはヘブライ語で書く」と述べ、アラビア語で書くのかヘブライ語で書くのかは特に決めていないという (‘Araidī 2010: 151.)。ハイファ大学のアラブ文学研究者ルーベン・スニールは、アライディが現代ヘブライ語とアラビア語を自由に使い分け、その間を相互に行き来していることについて、ヘブライ語・アラビア語の両方の文化に属していることに誇りを持っているためだと指摘している (Snir 2001: 212.)。

アライディは、アラビア語と現代ヘブライ語の2言語で創作活動を行っているが、現代ヘブライ語のみを創作の言語とするイスラエル・アラブ人作家も存在する。現代ヘブライ語で書く限り、作家たちの活躍の場は基本的にイスラエル国内に限定されるにもかかわらず、なぜこうした作家は現代ヘブライ語を選択するのか。イスラエル・アラブ人による初

の現代ヘブライ文学作品『新たな光のもとで』（1966年）を書いたマンスールのデビュー作は上記のアラビア語小説『そしてサミーラは留まった』である。小説に限って言えば、2010年に新作を発表したカシューアを除き、アラブ人がヘブライ語の文学を発表し続けることは難しい状況におかれる。マンスールは自伝と、2作目の小説を英語で書いているし、シャンマースもヘブライ語小説『アラベスク』発表以降、戯曲を数作発表した以外はミシガン大学に居を移し、教鞭をとりながらアラビア語と現代ヘブライ語の翻訳家として活動している。ヘブライ語で著作する作家はその選択がしばしば「政治的」な文脈で語られる。ヘブライ語で書くことがイスラエル社会への「同化」である、あるいはパレスチナ人としての「裏切り行為」であると否定的に捉えられるか、もしくは「文化の架け橋」として過剰に肯定的に祭り上げられることが多い。その「選択」に過剰な大義を読み取ることが作家の創作を阻むのだとも言える。

本論稿では、彼らイスラエル・アラブ人作家のうち、現代ヘブライ語で小説を書いた2人の作家アントン・シャンマース（'Antūn Shammās: 1950-）とサイド・カシューア（Sayyd Qashū'a: 1975-）の作品の内外での言語選択にまつわる言及を比較することで、マイノリティであるアラブ人作家にとっての2言語使用とそれを生み出した社会状況を考察する。

II アントン・シャンマースの言語観

作家アントン・シャンマースは1950年キリスト教メルキト派¹⁰⁾が住民の大多数を占めるイスラエル北部の村ファッスータに生まれた。家族とともにハイファへ移り住んだ後、1968年からはエルサレムのヘブライ大学で英文学を学ぶ。1970-75年に月刊のアラビア語文芸誌『東方』（*Al-Sharq*）の編集、ヘブライ語の新聞『街の声』（*Kol ha-'Ir*）での執筆などジャーナリスト、テレビのディレクターとしても活躍していたシャンマースは、学生時代からすでに詩人としてヘブライ語文芸誌『虹』（*Keshet*）に詩を発表していた。1974年には詩集『覚醒と睡眠の囚人』（'Asīr Yaqzātī wa-Nawmī）をアラビア語で、さらに同年ヘブライ語の詩集『ハードカバー』（*Kerikhah Kāshah*）を出版、1979年には同じくヘブライ語の詩集『緩衝地帯』（*Sheṭaḥ Hefker*）を出し、翌年1980年にイスラエルの文学賞を受賞している。1982年にはヘブライ語の童話『世界で一番の大嘘つき』（*ha-Shakran Hakhi Gadol ba-'Olam*）を出版した¹¹⁾。

バイリンガルの詩人として、また編集者、劇作家、ジャーナリストなど多方面で活躍していたシャンマースは1986年4月に初の小説『アラベスク¹²⁾』（'Arabeskot）を発表する。高尚な現代ヘブライ語で書かれた作品は発表後まもなくイスラエル国内で22,000部

を売り上げる。その後まもなく英訳も¹³⁾ 1988年のニューヨーク・タイムズの「その年の1冊」に選ばれ、2013年までに英語を含む7カ国語に翻訳されている¹⁴⁾。

彼の小説家デビュー作であり、唯一の長編であるこの『アラベスク』は、奇数章では故郷の村ファッスータを舞台にしたシャンマース一家のエピソードが、偶数章ではフランスのバリと米国のミシガン州に滞在する主人公の日常が交互に描かれた私小説風の作品である。シャンマースはこの家族の物語をなぜ母語のアラビア語ではなく、支配者の言語である現代ヘブライ語で発表するに至ったのか。

シャンマースと言語選択の問題に関しては、本人自身が80年代に多くのエッセイやインタビューで語っている。その文章からは、イスラエル・アラブ人の阻害された言語状況が浮かび上がってくる。あるコラムで彼は以下のように述べている。

「1967年まで、イスラエルのアラブ人はまさに文化的な隔離状態で暮らしていた。一方で彼らは現代アラブ文化からあらゆる面で切断されていたが…新興のヘブライ文化からも切断されているということであった。」(Shamās 1980: 10.)

こうした文化の断絶はシャンマースの執筆活動に多大な影響を与えた。当時について彼は、「1968年18歳のときに、私は選択肢がなかったのではなく選択したのだ、つまりヘブライ語を自分の継母の言語としてみなすことを選び取ったのである」(Shamās 1980: 8.)と語っている。それゆえ、1970年代のはじめにアラビア語でいくつかの詩編を発表した後間もなく現代ヘブライ語での創作活動に切り替えていった。

ところで、シャンマースはイスラエル社会におけるアラブ人をどのように捉えていたのだろうか。『マトリョーシカの罪¹⁵⁾』と名付けられた小論で、彼はこう語る。

「イスラエル国家は子を宿しているマトリョーシカ人形に似ている。彼女は時がくれば違法な子を産むように言いくるめられている。…イスラエル国家は全くのところ妊娠したマトリョーシカであり、妊娠した女性ではないのだ。妊娠したマトリョーシカは決して外側へ出産しない。内側に出産するのだ。48年に(イスラエルに)留まったアラブ人(シオニズムの最も致命的な失敗である)はマトリョーシカ-イスラエル国と姿形がすっぽりと当てはまる。彼らは他のマトリョーシカのおなかの中に移るなどということは望んでいない。…僕は(A.B.) イエホシュアよりもはるかにマトリョーシカ-イスラエル人なのだ。数カ月のうちに出版される僕のヘブライ語の小説は『遅い離婚』(A.B. イエホシュアの小説のタイトル)よりもずっとイスラエルのものになる。」(Shamās 1986b: 45.)

ここでシャンマースは、自分たちイスラエル・アラブ人を、「望まれぬ妊娠によって生まれた子」であり、さらにロシアの入れ子細工人形マトリョーシカのように内側に展開するものに喩えている。マトリョーシカは中を開けない限り、内側の人形が目に入ることはない。つまり表立っては見えないものの現状として、そして今後もアラブ人はイスラエルの内部に存在し続ける。それゆえ、シャンマースはあえて支配者の言語で作品を書くことに挑戦し、イスラエル社会にアラブ人が存在することを可視化したのである。

ではなぜ小説である必要があったのだろうか。シャンマースはその動機について、70年代にノンフィクションでイスラエル・アラブ人のことを書こうとした¹⁶⁾が、最終的に複数のアラブ人、ユダヤ人について書くことになってしまい断念した。自分が書きたかったのは個別のアラブ人でありユダヤ人だった、と説明した (Marzorati 1988: 100.)。シャンマースは歴史的に忘却されているイスラエルのアラブ人の集団的記憶を回復することよりも、個々の生を書くことでしか自分たちの匿名性が回復できないと考えたのである。

シャンマースを含め、カシューア以外のイスラエルのアラブの作家たちがキリスト教徒かドルーズ派であることは決して偶然ではない。彼らは「アラブ」としてユダヤ国家イスラエルのマイノリティであるだけでなく、ムスリムが8割を占めるイスラエル・アラブの内のマイノリティであり、またパレスチナ人や周辺のアラブ諸国の人びとにとっては敵国イスラエルで暮らしている「裏切り者」である。こうした「周縁」の意識がアラビア語世界との断絶に繋がり、作家にヘブライ語で著作させることになったのだろう。シャンマースはこの点を以下のように説明する。

「僕が試みているのは…ヘブライ語を非ユダヤ化することなのだ。…英語がそれを話す人びとの言語であるのなら、ヘブライ語だってそうだろう。そして国家というものはそこに住むひとのものでなければならない。」 (Shammas 1989: 10.)

シャンマースは植民地の被征服者が征服者の言語を発すること、つまり「植民地主義者の脱領域化こそが自らの領域を主張しうる唯一の方法」(シャンマース 1993: 15.) であると考えていた。だからこそ自分が現代ヘブライ語で書くことによって「ユダヤ国家」であるイスラエルを「脱領域化」しようとした。イスラエルの国語となった現代ヘブライ語を、被支配者であるアラビア語話者のシャンマースたちが自由自在に操り文学作品をつくりだす、これは支配者の言語に対する内側からの攻撃であり、「ヘブライ語がユダヤ人のことばである」という図式、さらに言えば国語としてのヘブライ語を「解放」することになる。

ヘブライ語でシャンマースが描いたのはファッスータ村に生きる市井のアラブ人の生である。口語アラビア語の語句を多用して綴った物語は、現代ヘブライ語の世界に自分の

ルーツであるアラブ文化の豊饒さをもたらすことに成功した。彼にとって、現代ヘブライ語を使うことは、アラブ文化の外に出たのではなく、あくまでもアラブ文化を表す一つの「手段」なのであった。

ヘブライ語を「脱領域化」することによってイスラエル・アラブの物語を伝えることとは別の側面として、シャンマースにとってヘブライ語の選択はアラブ社会からの「保全」の役割も担っている。彼は『アラベスク』を母語のアラビア語で書かなかっただけではなく、この作品を翻訳することも許可していない。その理由を彼は以下のように説明する。

「私はヘブライ語でその村（ファッスータ）について書いた。…もし私とその村についてアラビア語で書いていたら、私は明らかにもっと危険な状態に置かれるだろう。逆説的ではあるが、ヘブライ語は私に安全を与えているように思われるのだ。もし私がアラビア語で書いていたら、この自由を持つことができなかつたであろう。なぜなら私の叔父や叔母が何といったであろうか？…私はヘブライ語をかくれみものとして使用しているのである。」（Amit 1988: 76.）

つまり、この「自伝的な」物語を母語で発表しないことによって、自分の親類を含んだ周りに与える影響と、アラブ世界での彼の立場を「保全」しているのである。実際シャンマースはインタビューで、『アラベスク』は第1章をアラビア語で書いていたが、親戚たちの目を気にしてヘブライ語に変更したのだ、と明らかにしている（Marzorati 1988: 101.）。そのため、彼の小説『アラベスク』にアラビア語訳は存在しない。なぜなら、『アラベスク』の奇数章に描かれた彼の故郷の村の物語は、ユダヤ人に内通するもの、密輸に手を染めるものなど多くの「裏切り」が描かれているからである。この「裏切り」の物語は故郷の村のアラブ人には受け入れることができない「負」の記憶であった。彼にとって現代ヘブライ語で書いた『アラベスク』は、清濁合わせもったアラブ社会とその文化の豊穡さをあえて別の言語で表すことで、ユダヤ人読者にイスラエルに存在するアラブ世界を示した作品であった。そして、この「裏切り」の記憶や経験を描くには、現代ヘブライ語である必要があったのである。

『アラベスク』を書いて間もなく、シャンマースは米国へ移住した¹⁷⁾。2003年、エッセイ「水浸しになった図書館」で、エルサレム近郊の町エイン・カレムにある友人のアパートに置いてあった自分の蔵書が、水道管のトラブルで水浸しになってしまったという知らせに対し「その知らせを聞いた時、私は自分のアラビア語を失った」と感じ、この出来事を「私の個人的なナクバ¹⁸⁾」と名付けた（Shammas 2003: 122.）。さらに彼は、「もし尋ねられたとしたら、私は自分を翻訳家で言語の難民、アラビア語とヘブライ語、英語の3

つの言語からの亡命者だと評するだろう。」と語っている (Shammas 2003: 123.)。イスラエルを「マトリョーシカ」と称したシャンマースは、いまやアラビア語と現代ヘブライ語、英語の外側に自分の身を置き、その「離散」に積極的な意味を見いだしている。それは、ガヤトリ・スピヴァクや E.W. サイドら第三世界出身のポストコロニアル知識人が主張している「あえて周縁に留まること」と重なる¹⁹⁾。ヘブライ語を選択したシャンマースは、アラビア語からもヘブライ語からも距離をとることで「ディアスポラの知識人」となったと言えよう。

Ⅲ サイド・カシューアの言語観

シャンマースの次の世代に属するサイド・カシューア²⁰⁾は、イスラエル・アラブ人作家のなかで最も若い世代の一人であり、ムスリムとしてはじめて現代ヘブライ語で小説を発表した²¹⁾。2001年に『踊るアラブ人』でデビュー後、3冊の小説を発表する一方、テレビ番組のプロデュース²²⁾、ハアレツ紙週末版のコラムの執筆と、近年ユダヤ人に最も知られたアラブ人知識人である。2010年発表の長編『二人称単数』は発売一か月でおおよそ20,000部を売り上げた (Storey 2010.)。

シャンマースもカシューアも作品の主人公は「私小説風」のイスラエル・アラブ人である。しかしながら2人の作家の小説の決定的な違いは、作品に描かれている言語世界にある。前述した通り、自分の家族の属するアラブ世界やいわゆる「ディアスポラの知識人」の世界を描いたシャンマースに対して、カシューアの描く世界の大半はエルサレムを中心にしたユダヤ人が多数を占めるヘブライ語の社会である。小説に登場するアラブ人の主人公はアラビア語の世界を「遅れた文化」と見なしている。

例えば、イスラエル政府の教育プログラムによってユダヤ人学校に入学するアラブ人少年と彼が成長した後を描いた彼のデビュー作『踊るアラブ人』には、アラビア語よりもヘブライ語に価値を見いだす主人公のエピソードが語られる。主人公がユダヤ人の学校に入った最初の週、まわりのユダヤ人に“p”の発音が“b”になることをからかわれる。アラビア語に“p”という音がないために、彼は“p”をすべて“b”で発音してしまうのである²³⁾。

「ビートルズを全然知らないことにルームメイトが気づいて、笑い者にされたとき、僕は泣いてしまった。「ヒブシヨット (カブト^ビムシ)」というところを「フブシヨット」と言ったときにも、…英語の授業の後、生徒の一人は僕にアラファート (ヤーセル・アラファート元パレスチナ解放機構議長) みたいなアクセントがあるって言ったんだ。」

(Kashūa 2002: 68.)

こうした「恥」の意識は作品のそこかしこに現れる。主人公は成人してからも変わらない。彼にとって、アラビア語は自分の正体を知られる危険な言語である。だからこそ、自分の妻が自分や子どもにアラビア語で話しかけるのを聞くと不快になる。

「何人たりとも僕が彼らと同じ、そうでなくても同じようなアラブ人だと思われてはならない。…妻にはそれが何よりも先んじることなのだということがわからないのだ。…妻は混雑したエレベーターのなかでもショッピングモールの入り口でさえもアラビア語で話しかける。…公共の場所でだってアラビア語で赤ん坊をあやすのだ。なぜそんなにこだわるのだろうか？赤ん坊なんてのはアラビア語なのかヘブライ語なのかなんてわからないのに。」(Kashūa 2002: 149.)

最新作『二人称単数』にもヘブライ語世界に過剰なまでに憧れるイスラエル・アラブ人弁護士が登場する。西エルサレムに事務所を構え高級車を乗り回す成功者となったにもかかわらず、彼のコンプレックスは増すばかりである。ある時、仕事仲間のパーティーに呼ばれたときに話題に挙げた本『チーズはどこに消えたの』を全く知らなかったことが、彼にあることを決意させる。

「「チーズ」事件以来ずっと、二度と恥をかかないように文学的教養を深めるべく、弁護士は購読している高級紙ハアレツの水曜日の書評を読むことに決めた。その結果、本屋に入る前までにたいがいは何を買うべきなのかがわかっていた。」(Kashūa 2010: 33.)

カシューアの小説に描かれるアラビア語とヘブライ語は決して平等ではない。作中のアラブ人たちはヘブライ語の向こうに透けて見える西洋化した都市社会を見ている。それは『ハアレツ』(*Ha'arets*) 紙に発表した掌編小説『ヘルツェル真夜中に消える／シンデレラ』にも顕著である。不妊に悩むあるユダヤ人の母親が嘆きの壁に「たとえ生まれてくる子がアラブ人であってもよいので息子を授けて欲しい」と祈った結果授かった主人公ヘルツェルは真夜中になるとアラブ人に変身する。

「真夜中、ヘルツェルは全くの別人に変わる。…いくつかの変化のなかで、唯一はつきり違っているのは言葉だ。真夜中から夜明けにかけて、彼はヘブライ語がまったくわ

からなくなる。「OK」,^{ベ・セデル}「シケル」,^{マ・フゾム}「検問所」以外は、なぜかって？アラブ人もこうした単語をまるで自分たちの言葉みたいに使っているんだから。」(Kashūa 2005)

これはイスラエル版『ジキル博士とハイド氏』のごとく、昼と夜に異なる言語を話し、アイデンティティが変容してしまう男のことを描いた空想の物語である。カシューアはこの暗喩的な物語で、アラブ人とユダヤ人の生きるイスラエル社会が分断されつつも、実は表裏一体の関係にあることを示唆している。

カシューアの作品の主人公は、少なくとも「成功をおさめたアラブ人」としてイスラエルのユダヤ社会に受け入れられている。これはイスラエルが建国した後もなお伝統的なアラブ文化のなかで生きるシャンマース一家とは大きく異なる。ただしカシューアは、イスラエルのユダヤ人が「建前として」自分たちを受け入れていることに気がついている。だからこそ、他のイスラエル・アラブ人から見ると恵まれた生活を送っているはずの主人公たちが、精神的に苦悩する姿を描いたのである。『二人称単数』の主人公の弁護士も社会的成功とは裏腹になぜか満ち足りていない。ここ数年眠りが浅く、目覚ましが鳴る前の毎朝5時半に目覚めてしまう。弁護士というまぎれもない知識人でありながら、それを人に認められたいということだけが行動の規範となっている姿は「滑稽」ですらある。もう1人のアラブ人主人公に至っては、ユダヤ人のアイデンティティを奪取し「ユダヤ人」として生まれ変わる。カシューアはアイデンティティ変更の物語を描くことでイスラエル社会の現実を表している。

シャンマースらがイスラエルのアラブ人の「存在」をユダヤ人に示したのに対し、カシューアはもはやイスラエル社会の一員となったアラブ人の苦悩を描いている。UCLAの比較文学研究者ジル・Z・ホックバーグはカシューアが単に国家のマイノリティとしてのアラブ人を描いただけではなく、中東地域における「パーリア²⁴⁾」としての彼らを描いているのだと評価した(Hochberg 2010: 69-17.)。つまりカシューアは、イスラエルに「編入」されずでマイノリティとして認知されているアラブ人が実はあらゆる集団から「疎外」されてしまっている、という二重性、そしてその「疎外」を生んでいるアラブとユダヤの区分自体が実際は危ういバランスのもとで成り立っている現実を作品に込めたのである。

カシューアが現代ヘブライ語を表現の言語として選ぶ理由はシャンマースとは異なり単純である。親の世代もすでにイスラエルで育ち、自らもユダヤ人学校で教育を受けた彼にとっては、正則アラビア語(フスハー)よりも現代ヘブライ語で小説を書くことの方が容易であったからである。アラブ文学はほとんどの作品が正則アラビア語(フスハー)で書かれる。それゆえにアラブ文学は世界中のアラブ文化圏で流通することが可能な一方、普

段使用している口語との差があり、読み書きには教養として高度のアラビア語力が要求される。つまり、家では口語アラビア語、教育はヘブライ語で受けたカシューアにとって、正則アラビア語（フスハー）は身近な言語ではなかった。軍事統治²⁵⁾で移動を制限された時代に育ち、エルサレムのヘブライ大学英文学部初のアラブ人学生であったシャンマースらの世代とは異なり、イスラエルの大学でユダヤ人学生と肩を並べて学んでいるアラブ人は今や珍しくない。カシューアは最近のインタビューでも、「ヘブライ語以外ほとんど読まないし英語も読まない。だから僕にとっては翻訳文学が適しているのだ。」と発言し、2010年に彼の小説のアラビア語翻訳が出版された際も、正則アラビア語（フスハー）の翻訳による文章のリズムの喪失に違和感を持つほどであった（Storey 2010）。

カシューアらイスラエル・アラブ人の第2世代は、親の世代が幼少の頃からすでにイスラエル社会の「内側」にいる。家庭で用いているアラビア語には既に現代ヘブライ語の語彙が混入している。作品の言語は現代ヘブライ語で共通しているが、シャンマースの作品には、アラビア語の世界が描かれている。一方カシューアの作品には当たり前のように現代ヘブライ語の世界が描かれる。『ヘルツェル真夜中に消える』のヘルツェルは二重人格であることを恋人に言い出せない気弱な青年である。しかし真夜中になるとその性格は一変する。アラビア語に話す言語が変わると同時に、いらつき、その感情を隠そうともせず粗野な振る舞いに終始する。現実にはあり得ない設定によってカシューアが描いたのは「ヤヌス」状態にあるイスラエル・アラブ人の状況なのであり、シャンマースの「マトリョーシカ」と相通ずるものなのではないだろうか。

おわりに——意識的選択から無意識的な選択へ——

本論稿では、イスラエルにおけるアラブ人作家のなかでヘブライ語を作品言語として用いたシャンマースとカシューアの言語観を中心に追った。

現代ヘブライ語を創作言語に選んだ作家たちの言語選択はしばしば「政治的」な選択であるとされてきた。シャンマースは、幼少期にアラビア語の翻訳から欧米の文学に慣れ親しんでいたが、ユダヤ人とともにヘブライ大学で文学を専攻した。つまり、アラビア語とヘブライ語（さらには英語）で文学を「体験」したのである。その一方で、イスラエルで生きる状況によって、母語であるアラビア語文化と断絶してしまった自身に悔恨を感じている。自分の言語状況をアラビア語世界からの「ナクバ²⁶⁾」と称したシャンマースは、だからこそヘブライ語でイスラエル内部に存在するアラブ社会を描いた。そしてヘブライ語によって、アラビア語では得ることのできない「安全」を獲得した。

シャンマースよりちょうど1世代下にあたるカシューアは、親がすでにイスラエルが建

国した頃に生まれイスラエルの占領下で育った世代である。カシュアアは彼のようなアラブの村出身のムスリムであっても、一部が現代ヘブライ語社会に取り込まれている。それは物理的な占領ではなく、文化的なアラビア語世界の断絶、つまり、ヘブライ語世界の「占領」とも言える。カシュアアはこうしたいわゆる文化的な「ナクバ」を経た社会で生まれ育ったのである。

以上のように、イスラエル・アラブ人作家については、作家の世代によって取り巻く言語環境が微妙に変化し、それが彼らの作品世界に影響を与えている。シャンマースは『アラベスク』でアラビア語の口語をヘブライ文字で表すことで、読者にアラビア語の豊穡さを伝えた。そして、ヘブライ語を消極的な理由ではあったものの、自ら能動的に選択した。一方、カシュアアはアラビア語の世界をひた隠しにして生きることで、イスラエル社会での成功を生み出すような状況をパロディとして自虐的に表現する。彼のヘブライ語使用はもはや選択とは言えない。彼にとって文学言語という点においては、正則アラビア語（フスハー）よりもヘブライ語の方が「実践的」な言葉であり、その選択は自明のものなのである。

最後に、イスラエルのもう一つの「アラブ」、ミズラヒーム作家の言語選択とイスラエル・アラブ人作家と比較することで、イスラエルのマイノリティによる言語文化と社会との関わりを明らかにすることが今後の課題である。

注

- 1) カフカが母語のチェコ語ではなくドイツ語で書いたことに関して、その作品を「マイナー文学」として取り扱ったのはG. ドゥルーズとE. ガタリの2人である。詳しくはドゥルーズ&ガタリ [1979] を参照せよ。
- 2) パレスチナ・アラブ人作家の言語選択に関しては、比較的多くの研究者によって論じられている。例えば、イスラエル文学研究者ハナン・ヘーベルはシャンマースによる現代ヘブライ文学を、ドゥルーズ/ガタリのいう「マイナー文学」の1つとして評価した (Hever 1990)。またルーベン・スニールとアミ・エルアド・ブスキラはシャンマースと同年のドルーズ派作家/詩人ナイーム・アライディとを詩作を通じて比較し、前者は彼らの選択を使命感としてのヘブライ語使用と位置づけ、後者はシャンマースのヘブライ語に関するアンビバレントな部分を暴いている (Snir 1995b, 2001, Bouskila 1999)。その他 Brenner [1999, 2001], Feldman [1999] などがシャンマースの『アラベスク』と言語に関して言及している。また最近の研究では Kayyal [2008] でシャンマースとカシュアアの比較がなされているが、むしろカシュアアの文学性の低さを指摘するのに終始している。カシュアアに関しては拙論細田 [2013] もある。同論文では作家の言語選択の問題に言及しつつ、カシュアアの作品に見られる登場人物の「二面性」について論じている。
- 3) イスラエルのアラブ人のうち、イスラームの異端と言われる宗派のドルーズと遊牧民 (ベドウィン) はイスラエル政府のアラブ人分離統治政策によって「民族」の認定をされ、イスラエル社会に統合されていった。その結果、1956年からドルーズ派はユダヤ人と同様にイスラエル国防軍への徴兵参加が義務づけられている。

- 4) 詩人ではハンナー・アブー・ハンナー (Hannā Abū Hannā: 1928-), ターハー・ムハンマド・アリー (Ṭaha Muḥammad ‘Alī: 1930-2011), アフマド・フサイン (Aḥmad Ḥusain: 1939-), サリーム・ジュブラーン (Salīm Jubrān: 1941-2011), ライラー・アルーシュ (Lailā ‘Alūsh: 1948-) などが, 作家ではムハンマド・ナッファア (Muḥammad Naffā’: 1940-), ムハンマド・アリー・ターハー (Muḥammad ‘Alī Ṭaha: 1941-), ザキー・ダルウィーシュ (Zakī Darwīsh: 1944-) などがいる.
- 5) アラビア語の転写では「イミール」が正しいが, 実際の発音は「エミール」となり, 英語表記も「Emil」となっている. 本論では特に通例用いられている発音を元にした表記を採用する. 以下「Qāsīm」→「カーセム」, “Antūn”→「アントン」など.
- 6) ダルウィーシュは, 「ナクバ」により, 故郷の村ビルウェを追われた後, 一時はレバノンに逃れたもののイスラエル領内に戻り, 国内離散者となった. 共産党での活動や, 彼の詩が抵抗詩として読み継がれた結果, 60年代にはイスラエル当局に拘束され, 1971年からオスロ合意までのおよそ20年間亡命生活を行った.
- 7) 1960年代後半になると, イスラエル国外のアラビア語書籍の出版社がこぞってイスラエルのアラブ人作家の作品の出版をはじめたという. その要因として, ①1967年の第3次中東戦争によってヨルダン川西岸とイスラエル領内の交流が増したこと, ②イスラエルのアラブ人が「発見」されたこと, ③それまでイスラエル内で発刊されていたアラブ人向けの媒体が相次いで終刊したこと, が挙げられている (Bouskila 1999: 23-24.).
- 8) ヘブライ語の詩集で大統領賞を受賞した同じくドルーズ派のサルマーン・マサールハ (Salmān Masālha: 1953-) らがいる.
- 9) 2012年にはノルウェーのイスラエル大使に任命された.
- 10) 東方典礼カトリック教会に属し, 18世紀にギリシア正教会から独立した宗派. 信徒はシャーム地方を中心に移住先の欧米にも分布している.
- 11) 『世界で一番の大嘘つき』は2011年, およそ30年ぶりに再版された.
- 12) 「アラベスク」(*arabesque*) とはフランス語で「アラビア風の」という意味であり, 一般的にはさまざまなモチーフをシンメトリーに組み合わせた幾何学文様の総称で, 偶像崇拜を否定したイスラーム建築のモチーフとして使われている. 音楽の分野では「アラベスク」が一つの楽想を幻想的あるいは装飾的に展開する作風を表しているが, シャンマースはこれを物語で表したといえる. 作品にはそれが端的に表現されている箇所がある. 「ユーセフ叔父さんの話はそれぞれが絡まり合って, 抱き合い, バラバラになって, くねりながら記憶の終わりのないアラベスクをつくりだした. 多くの話が何度も繰り返し語られたし, 話すたびに違っていた. 彼の人生で2, 3度しか語られないような別の話もあった. そのすべてが, 始めと終わり, 内と外, 現実と虚構が結びついた幻想の渦巻くなかで, 彼の周りをぐるぐると回っていた.」(Shamās 1986a: 203.).
- 13) アメリカでは150万部を売り上げたという (Marzorati 1988: 54.).
- 14) 英語 (*Arabesques*: 1988年 [アメリカ], 1988/89年 [イギリス]), フランス語 (*Arabesques*: 1988年), スペイン語 (*Arabescos*: 1988年), オランダ語 (*Arabesken*: 1989年), ドイツ語 (*Arabesken*: 1989年), イタリア語 (*Arabeschi*: 1990年), ポルトガル語 (*Arabescos*: 1991年) の計7カ国語 (国別に見ると8カ国語) である.
- 15) このタイトルは, その前に書かれたイスラエルのユダヤ人作家 A.B. イェホシュアの『シムエルの罪』への返答として書かれたことによる. これも後に「イェホシュア-シャンマース論争」と呼ばれた一連のやりとりの一つである. イェホシュアとシャンマースは友人同士であるが, 1980年代に『アラベスク』とパレスチナ・アラブ人のアイデンティティを巡ってシャン

- マースと論争となった。論争について詳しくはグロスマン [1997]、白杵 [1998] を参照。
- 16) イスラエルのパレスチナ・アラブ人については 1966 年にシャンマースと同じ村出身の弁護士であるサブリー・ジュリスが『イスラエルのなかのアラブ人』を執筆している。(邦訳は 1975 年出版)
- 17) 注 14) 参照。
- 18) *Nakbah* とはアラビア語で「大災厄」を表す。1948 年のイスラエル建国とその後の戦乱で多くのパレスチナ人が殺され、70 万人以上が難民となったことを表す語。
- 19) サイドは『知識人とは何か』で「知識人とは亡命者にして周辺的存在であり、またアマチュアであり、さらには権力に対して真実を語ろうとする言葉の使い手である」(サイド 1998: 20.) と定義している。一方スピヴァクは、自分がインド出身の女性という「弱者」であると同時に、特権を持った知識人であることを強く認識しつつ、「サバルタンの女性という歴史的に沈黙させられた主体に…語りかけるすべを学び知ろうと努めるなかで、ポストコロニアルの知識人はみずから学び知った女性であることの特権をわざと「忘れ去ってみる (unlearn)」。(スピヴァク 1998: 74.) ことで弱者に寄り添い、周縁者として代弁することこそが知識人の役割であるとした。
- 20) デビューしてまだ 10 年ほどの若手作家であるため、カシューアを取り上げた研究はそれほど多くない。例えば作品からイスラエルのユダヤ人と同胞のパレスチナ・アラブ人の双方からの「疎外」を読み解いた Hochberg [2010]、『踊るアラブ人』にみる、パレスチナ・アラブ人のイスラエル社会への同化をテーマとした Rottenberg [2008] など、基本的にはアイデンティティの問題を取り上げている。
- 21) カシューアの後は 2010 年ヤッフオ (ヤーファー) のムスリム家系出身のアイマン・シクサク ('Aiman Siksak: 1984-) がヘブライ語小説『ヤッフオへ』 ('*Al Yafu*) を発表している。
- 22) 彼がプロデュースした人気コメディドラマ『アラブのお仕事』 ('*Avodah 'Aravit*) は第 1 シーズン (2007)、第 2 シーズン (2011) とともにイスラエルの主要局チャンネル 2 のゴールデンタイムに放映され、ユダヤ人に人気を博している。2013 年 12 月現在、第 4 シーズンまで放映され、その視聴率は 30% に達したという。
- 23) ちなみに英訳ではこのエピソードが「僕が、ポップミュージックの代わりにポップミュージックと言ったとき、彼らは笑った。“ピンハス校長”の代わりに“ピンハス校長”に言いつけるぞ、と脅したときだって。」と変更されている (Kashua 2004: 92.)。
- 24) カースト制における「不可触民」のこと。ホックバークはユダヤ人思想家ハンナ・アーレントの『バーリアとしてのユダヤ人』を念頭に置いていると考えられる。
- 25) イスラエル建国後から 1966 年までパレスチナ・アラブ人は居住地をブロックに分けられ、その地域をまたぐことなどの移動を制限されていた。
- 26) この文脈における「ナクバ」とは、「大災厄」という意味よりむしろ、「1948 年イスラエル建国によって祖国から離散した事象」という歴史的な「ナクバ」という意味が込められている。つまり、シャンマースは自らの蔵書を失うことを、自分のアラブ文化からの離散を表していると捉えたのである。

参考文献

[日本語文献]

- アンダーソン、ベネディクト (1997) 『想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』白石さや他訳、NTT 出版。Anderson, Benedict (1991) *Imagined Communities: Reflections on the*

- Origin and Spread of Nationalism*, London: Verso. (Revised and Extended Edition)
- 白杵陽 (1998) 『見えざるユダヤ人：イスラエルの《東洋》』 平凡社.
- グロスマン, デイヴィッド (1997) 『ユダヤ国家のパレスチナ人』 千本健一郎訳, 晶文社.
- Grossman, David (1992) *Nokhahim Nifkadim*, Bnei Brak: ha-Sifriyāh ha-Ḥadashāh.
- ゲルナー, アーネスト (2000) 『民族とナショナリズム』 加藤節監訳, 岩波書店. Gellner, Ernest (1983) *Nations and Nationalism*, Oxford: Blackwell Pub.
- サイード, エドワード W. (1998) 『知識人とは何か』 大橋洋一訳, 平凡社. Said, Edward W. (1994) *Representation of the Intellectual: the 1993 Reith Lectures*, New York: Vintage.
- シャマス, アントーン (1993) 「二言語解決策」, 『みすず』 白杵陽訳, 410, pp.2-18.
- ジュリス, サブリ (1975) 『イスラエルのなかのアラブ人』 若一光司・奈良本英佑訳, サイマル出版会.
- Jiryis, Sabrī (1966) *ha-'Aravim be-Yisra'el*, Haifa: Al-Ittihād.
- スピヴァク, ガヤトリ (1998) 『サバルタンは語ることができるか』 上村忠男訳, みすず書房.
- Spivak, Gayatri Chakravorty (1988) “Can Subaltern Speak?” in Cary Nelson and Lawrence Grossberg eds., *Marxism and the Interpretation of Culture*, Springfield: University of Illinois Press.
- ドゥルーズ, ジル, フェリックス・ガタリ (1978) 『カフカ：マイナー文学』 宇波彰訳, 法政大学出版局. Doruze, Gil & Felix Gatari (1975) *Pour une littérature mineure*, Paris: Les Éditions de Minuit.
- 本橋哲也 (2005) 『ポストコロニアリズム』 岩波書店.
- 細田和江 (2010) 「パレスチナ・アラブ人によるヘブライ語の小説：アントン・シャマスの『アラベスク』とヘブライ語をめぐる考察」 梅村坦, 新免康編 『中央ユーラシアの文化と社会』 中央大学出版部, pp.209-234.
- (2013) 「『私は誰?』 イスラエルのアラブ人作家サイイド・カシュアアの小説における失われたアイデンティティの探求」 『第6回ユダヤ学会議報告集』 CISMOR, pp.79-96.
- [外国語文献]
- ‘Amit, Daliyah (1988) “‘Anṭon Shamās: Arabeskot”, *Prōzah*, no.101-102, May-June, pp.73-78.
- ‘Araidi, Na‘im (2010) “Likhtov be- ‘Ivrit ke-Safah Shniyah” [第二言語としてヘブライ語で書くこと], in Nurit Buchweitz eds., *Likhov be-Sfat ha-‘Aher*, Tel Aviv: Resling, pp.149-153.
- Bouskila, Ami Elad (1999) *Modern Palestinian Literature and Culture*, London: Frank Cass.
- Brenner, Rachel Feldhay (1999) ““Hidden Transcripts” Made Public: Israeli Arab Fiction and Its Reception”, *Critical Inquiry*, vol.26, no.1, Autumn, pp. 85-108.
- Feldman, Yael (1999) “Postcolonial Memory, Postmodern Intertextuality: Anton Shammas’s Arabesques Revisited”, *PMLA*, vol.114, no.3, pp.373-389.
- Ginsburg, Shai (2006) ““The Rock of Our Very Existence”: Anton Shammas’s “Arabesques” and the Rhetoric of Hebrew Literature”, *Comparative Literature*, vol.58, no.3, pp.187-204.
- Hever, Hannan (1987) “Hebrew in an Israeli Hand: Six Miniature on Anton Shammas’s “Arabesques””, *Cultural Critique*, no.7, Autumn, pp.47-76.
- (1990) “Minority Discourse of a National Majority: Israeli Fiction of the Early Sixties”, *Prooftexts*, vol.10, no.1, pp.129-147.
- Hochberg, Gil Z (2010) “To Be or Not to Be an Israeli Arab: Sayed Kashua and the Prospect of Minority Speech-Acts”, *Comparative Literature*, vol.62, no.1, pp.68-88.

- Kashua Sayed (2004) *Dancing Arabs*, New York: Grove Press.
- Kashūa Sayed (2002) 'Aravim Rokdim, [踊るアラブ人], Moshav Ben-Shemen: Modan Publishing House Ltd. ヘブライ語
- (2004) *Ve-Yihi Boker*, [そして夜が明けると], Jerusalem: Keter. ヘブライ語
- (2005) "Herts! Ne'elam be-Hatsot", *Ha'aretz*, 3 Oct. <http://www.haaretz.co.il/misc/1.1048468> (2012年3月7日アクセス) ヘブライ語 カシューア, サイド「ヘルツェル真夜中に消える／シンデレラ」細田和江訳, 中東現代文学研究会編, 『中東現代文学選2012』, pp. 374-383.
- (2010) *Guf Shenī Yahid*, [二人称単数], Jerusalem: Keter. ヘブライ語
- Kayyal, Mahmoud (2008) "Arabs Dancing in a New Light of Arabesques": Minor Hebrew Works of Palestinian Authors in the Eyes of Critics," *Middle Eastern Literature*, 11-1, pp.31-51.
- Mantsūr, 'Atallāh (1966) *Be'Or Hadash*, [新たな光のもとで] Tel Aviv: Karni Publishers LTD. ヘブライ語
- Marzorati, Gerald (1988) "An Arab Voice in Israel", *New York Times Magazine*, September 18, pp.54, 100-101, 106-107.
- Rottenberg, Catherine (2008) "Dancing Arabs and Spaces of Desire," *TOPIA*, 19, pp.99-114.
- Shamās, 'Anton (1974) *Kerikhah Qashah*, [ハードカバー], Tel Aviv: Sifriyat Po'alim. ヘブライ語
- (1979) *Sheṭaḥ Hefker*, [緩衝地帯], Tel Aviv: ha-Kibbutz ha-Me'uḥad. ヘブライ語
- (1980) "Mitahat la-'Ets, Mitahat la-Kurat Gag: Yoman Kri'a" [木陰, あるいは屋根の下: 日記], *Iton 77*, (April-May), pp.8-11.
- (1982, 2011) *ha-Shaḥran Hakhī Gadol ba-'Olam*, [世界で一番の大嘘つき], Jerusalem: Keter. ヘブライ語
- (1986a) *Arabesqot*, [アラベスク], Tel-Aviv: 'Am 'Oved. ヘブライ語
- (1986b) "'Ashmat ha-Babushka", [マトリョーシカの罪], *Poliṭiqah*, no 5-6, pp.44-45.
- Shammās, 'Antūn (1974) *'Asīr Yaqzātī wa-Nawmī*, [自らの覚醒と睡眠に囚われて], Jerusalem: Al-Sharq. アラビア語
- Shammas, Anton (1989) "Your Worst Nightmare", *Jewish Frontier*, 56.4, pp.8-10.
- (2003) "The Drowned Library", in Isabelle de Courtivron ed., *Lives in Translation: Bilingual Writers on Identity and Creativity*, Hampshire: Palgrave Macmillan, pp.111-128.
- Siddīq, Muhammad (2000) "On Composing Hebraic Arabesques," *Alif: Journal of Comparative Poetics*, No. 20, pp.155-167. アラビア語
- Snir, Reuven (1995) "'Hebrew As the Language of Grace': Arab-Palestinian Writers in Hebrew", *Prooftexts*, 15, pp.163-183.
- (2001), "'Postcards in the Morning': Palestinians Writing in Hebrew", *Hebrew Studies*, 42, pp.197-224.
- Storey, Meg (2010) "Playing Wii with a Gun to His Head: An Interview with Sayed Kashua", *World without Borders* (The Online Magazine for International Literature), Sep. 20th. <http://wordswithoutborders.org/dispatches/article/playing-wii-with-a-gun-to-his-head-an-interview-with-sayed-kashua> (2011年12月15日アクセス)